

巻頭言

1985年(昭和60年)6月29日、東京大学駒場第2キャンパスにあった文部省宇宙科学研究所の会議室で「小惑星サンプルリターン小研究会」という名の研究会が開かれ、30名ほどの参加者があった。今の惑星科学界の状況からすれば30名の参加者というのは、本当に「小研究会」だと感じるかもしれないが、当時の惑星科学界各分野の中心的メンバーが参加した研究会であった。日本惑星科学会が発足するのは、その7年後であったが、初代から第3代までの会長となる先生方も参加されていた。

その収録をあらためて読み直してみると、太陽系形成論、隕石学など多くの側面から、小惑星サンプルリターンの意義について真剣な議論がされていた事がわかる。その実現のために、今となっては意外に感じるかもしれないが、フライバイ、ランデブー、軟着陸と段階を踏んで進めることを前提に考えられていたことがわかる。なにしろ、その当時の日本の宇宙探査は、「さきがけ」が初めて地球の重力圏を脱してやっと惑星間航行を行えるようになったばかりの状況であったから当然のことであったかもしれない。当面の実現手段が無い、遠い高い目標の意義を議論していたともいえる。そのような現実味もあまりない事を自由に議論しようという雰囲気が当時の惑星科学界やその周辺にはあったということである。

その後5回ほどの小さな勉強会が開かれてこの研究会の活動は終わっているので、「はやぶさ」「はやぶさ2」に直接続くものとなったとは言いにくい部分もある。しかし、高い目標に向かって自由に議論できていたことが、その成功につながる一つの起点にはなったのではないか。

このような当面の実現性のないような計画の意義を自由に議論するような事が現在あるかと言えば皆無であろう。もちろん、日本経済のその後の長い低迷や大学をとりまく様々な事柄といった外部要因が大きい事もあるが、そのような議論を我々自身の意識として避けていることはないだろうか。そのようなことを考えるとともに、その当時の諸先生方の偉大さを改めて感じるところである。

高木 靖彦 (愛知東邦大学)